
失くし者

左藤 宗多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失くし者

【Nコード】

N3325BA

【作者名】

左藤 宗多

【あらすじ】

立島博哉は冬休みも終わり大学に向かう途中、己の不注意で交通事故に遭った。相手の信号無視で交通事故に遭った。一つは夢、もう一つは夢の中の夢だった。だが、正夢をみる博哉はなんとかしてその二つの現実を回避するが…？

1 話（前書き）

処女作。

超稚拙な文章でもOKな方どうぞ。

1話

新年が明けたばかりのまだ肌寒い季節。

少年から青年へと顔つきを変貌させたばかりと見える男が、自宅から浮かない表情で外に出た。

「初っぱなからそんな元氣なくてどうすんの。シャキツとしろ、シヤキツと」

「最初の登校日はこんなもんでしょ。授業あるし」

「頑張つてよー。サボらないようにね」

男の後ろにいた女性は男の背中に喝を叩き込んだ。それを平然と受け入れた男は小さなため息を吐き、眼鏡の位置を矯正し、ポケットから取り出した鍵を自転車の鍵穴に差し込み解錠する。

籠に放り込んでおいた手袋をはめ、覆い隠されていた口を出すところまでマスクを下げた。

「ところで母さん。小学生じゃないんだ。外まで見送る事ないでしょ。帰ってこない訳ないんだし」

「気にすんなよ」

右手を一回お辞儀させ、誤魔化し笑う。いつもの調子に撒かれた男は特に反応するでもなく自転車に跨がった。そのところ、さして気にしてるという訳でもなさそうだ。

「そんじゃま、いつてきまーす」

「いつてらっしゃい」

「次に会うときは病院のベッドの上だ」

マスクを被って、ペダルをこぎならす男の背後で母親は息子の迷言に苦笑する。

見送りを終えた母親は家に帰り居間のソファに座る。ちょうど朝のニュース番組恒例の星座占いが始まるところだ。

ところで彼女は占いが好きだ。どれくらい好きかというと恋愛相談で「貴女と彼って相性いいんじゃない?」「ホント!? やった!」と無邪気にはしゃぐ程に好んでいる。占いの結果で朝のテンションが左右されるなんて人もいることだろう。彼女はまさにそれであった。

「二位か…」

「あたし七位って微妙だなあ」

その親にしてその子あり。寝癖も直さずパジャマのまま朝食にありついている子供達が結果を知り思い思いに呟いた。

彼等を尻目に自身が一位であると、掌で膝に気合いを入れ立ち上がる。

(良いことあったら今夜はカレーね)

だが、冷蔵庫を開くとどうだろう。カレーを作るには材料が乏しい。嫌々ながらも買い物に出掛ける決意をした母親。夕飯のカレーは確定らしい。

気温が低ければ寒い。

風が冷たければなお寒い。

いくら防寒具を纏おうが、風は服を通り抜けて鳥肌を立たせる。だが、軽快に自転車をこいでいけば体温は次第に上昇するもので、何時の間にか額にほんの少し汗も浮かんできていた。

坂を下り、勢いづけて一気に坂を上ると息が荒れる。イヤホンから流れる音楽を口ずさみながら上れば誰だって多少はそうなるだろう。運転中のイヤホンは法律違反だが、朝っぱらから警官も補導してきたりしないだろう、と思っている為に敢えて無視していた。

実際、正面から警官が向かってきて心音が高鳴った事もあるが、一声も掛けられないまますれ違うくらいだ。気にしなくなっても致し方ない。

男は空を見上げる。青々とした色に清々しさを感じ、一瞬だけ目を閉じた。イヤホンと耳の隙間に侵入する風が空気を切り裂く。火照った身体に冷たい風が心地良い。身体のコに伝わる感覚に浸り目を開く。

そして、男は狼狽する。事態は曇った眼鏡でもハッキリと認識できた。

横断歩道に飛び出した我が身。

灯ったままの赤信号。

視界の隅っこに映るトラックは接触するかしないかの距離。

止まらないならスピードを上げる乗り切る。瞬時に弾き出した答えだ。

だが、まあ結果は良くなかった。寧ろ限りなく悪かった。

男に与えられた行動は刮目する時間だけで、衝突を済ませた身体は宙を舞い、地面に叩きつけられ転がり、やがて動かなくなった。

1話（後書き）

短いすね。

長文書くの得意じゃないんで仕方ないんです。

物足りない文章だけど、その辺は妥協してくれると有難いです
人）

2話

今朝、非常に夢見が悪いが為、寝不足気味に陥った男　立島博哉　は母親の見送りを嫌々ながら許可し、現在、大学へ向かう途中にあった。

使い古した緑色の自転車に跨った彼が力強くペダルを漕ぐたびに、鍵につけた鈴が鳴る。冷たい風が吹き付けるが、彼の額にはとくに汗が浮かんでいた。いくら寒かろうが、自転車に乗る彼にとっては毎度の事である。

だが、何時もと違う点が一つだけある。それこそ耳につけるイヤホンだ。今日に限ってどうしてつけないのか。理由はあった。忘れた訳ではない。ちゃんとバッグの中に結んで入れてある。知ってる上で彼は耳に装着することを拒否した。

聞く人が聞いたら笑うはずだ。十人に訊ねたら笑うか、適当に受け流すか、無視をするであろう理由。寝不足の原因でもある今朝見た夢にあった。

妙にリアルな夢だった。実体験したかのように博哉を死と向かい合せたのだ。

青信号でトラックの運転手からすれば何事もなく通過するはずだった横断歩道。そこに信号無視をした一台の自転車。トラックは平常運転のまま自転車と、それに乗っていた人を跳ね飛ばした。

飛んで、叩きつけられ、跳ねて、転がり、停止。

車は急に止まらない。ブレーキをかけたトラックが眼前に迫りくる恐怖の中、博哉の夢はそこで終わった。

（夢ならいい。自分は死んでいない。何もなかった。だから坂を上っているんじゃないか。ただの夢だ。所詮、夢なんてものは勝手に

思い描いた、空想、幻、絵空事の塊なんだから)

自分を必死に誤魔化す博哉。それでも不安と恐怖は拭えなかった。博哉が見た夢は”現実”だった。正確にいうなら夢。そうではなく、夢の中で受けた痛みがリアルに感じた。それ故に彼は夢を夢として片づけてしまいたくなかったのだ。

それともう一つだけ。彼の見た夢は今まで一度たりともハズれた事はない。ゲームや漫画のキャラクターが出てきたとか、宇宙人が目の前に現れたとか、そんなものは別として、彼の経験上、現実感あふれる夢にでてきたモノその全てが現実となるのである。正夢と言ってもおう。

だが、博哉はその夢を今まで一度として有効活用してきた事例はない。なにせ夢は起床した瞬間には忘却しているもので、残ったものは僅かだ。まさに夢の欠片。

現実化したモノは知っていたとしても、自分に利益として書き換える事なんて出来ない内容だった。

だが、今回ばかりは違う。博哉は自信を持っていた。今朝見た夢の覚えている内容は赤信号で渡ったのが原因で轢かれた。完全に博哉の不注意が招いた悲劇だ。ならば改善する点は、信号の手前でストップして、信号機が青に変わるのを待って渡るだけの話ではないか。

(俺が交通事故で死ななくても良い未来。あんなもの二度は御免だからな)

本当なら、死ぬなら交通事故で人生終えるのが良い、とか吹聴していたが、一度リアルに経験したせいで、今はそんな思いもなくなっていた。それなら死んではいいんだ、と訊かれた時はどうするか。博哉は胸を張って答えるだろう。

「YES」と。

結果、博哉は死んだ。人間の最期。だが、博哉が最も望まない形で成った。

考えていた通り、赤信号が点灯しているタイミングで横断歩道の手前で停止した。平常運転で通り過ぎるトラック。

（あれに間違いない。ナンバープレートの数字も夢と一致。これで俺のせいで不幸な運転手だった奴は問題なく生きていける）

そして、俺も。

博哉が安堵しきつたのと同時に甲高いエンジン音が轟いた。青信号に点灯した信号機を見て、ペダルを踏み込んでいた博哉は、音の発生源を視界にいれ、ぞつとして、気づいた時には宙を舞っていた。周りの悲鳴と共に高く高く、遠く遠くまで飛んだ博哉は地面に横たわり、自身から流れる血を見てしまった。

（やっぱり紅いんだな。……道路交通法は守ろうよ）

その直後、事切れてしまった。

2 話（後書き）

また死んでしまいました。
というわけでtake3へ

3話

（貴方は夢の中で夢を見た経験はありだろうか？ 例えば、トラックに轢かれた挙句に頭部を踏みつけられて死んだとか。その夢を現実として把握していたのに、今度は信号無視に速度無視の暴走スポーツカーに跳ね飛ばされて、実は骨が出たまま死んでしまったとか、ないだろうか？ あるわけないよ。だって俺に起こった話だもん。そんなドンピシャリの人が居たら是非ともお近づきになりたい）

少し我を失いながら、今日も博哉は道を往く。

どうかしている。夢の中で死んで、それに恐怖して死から逃れられて良かったと思つた瞬間に地獄だ。そう思っていたのに、それも夢でした、なんて質が悪すぎる。どちらも実体験そのものみたいだった。一回目は二回目より痛みは薄かったが、それでも人生十八年、受けてきたことがない痛みだ。それを二回も。

（ふざけんな。こんな、こんな理不尽な夢に振り回され続けてたまるか！ もう交通事故は一生かけて御免こつむる。道路交通法を崇め奉ると誓つたんだ……多分）

大分、我を失いながら、地獄の門にたどり着く。

赤信号で停止。青信号に点灯し、博哉は右を見て、左を見て、もう一度だけ右を見た。

けたたましい音を鳴らして猛然と通過するスポーツカー。それを親の仇、とばかりに睨み付けた。

ついに博哉は三度目の正直となる横断歩道は無傷で事故を起こす事もなく渡り切った。この時点で感動を覚えた博哉の目尻には涙が

溜まりコートで拭い去る。清々しい面持ちで祖母祖父の家の庭に自転車を置く。

ポストには新聞が挟まっており、それを取りに来たらしい髪にパーマをかけた老婆と鉢合わせた。

「おはよっ」

「っん……ああ、おはようございます」

老婆は一瞬だけ躊躇してから挨拶をして続きを話す。

「お若いわねえ。真也のお友達ですか？」

「……は？」

「あら、違うの？」

兄のお友達扱い。突然の事態に弱い。判断力はあるが優柔不断で決心をつかせるのも時間が掛かる。だから、この老婆もとい祖母の発言を冗談として納得できても、憤りを覚えるのは無理もない。

「何を言ってるの老婆ちゃん。孫を忘れたの？ 認知症？」

「冗談で言ってるのだから本気にして怒るのは些か度が過ぎると思ったのか。博哉はそれをせず、おどけて軽さを醸し出す感じで受け答えた。だが、最後の言葉が拙かったのか、祖母は怒り心頭に発した。

「認知症って……見ず知らずの人に対してその物言いはなんですか？ いくら孫のお友達だからって許しませんよ！」

「は、え？ だから冗談はやめて」

「何が冗談よ！ 人に言ってる良い事と悪い事の区別もつかないのかねアンタ！」

博哉には何がどうなっているのかさっぱりだった。自分が祖母の孫ではないと、赤の他人だと怒鳴られている理由を誰かに説明して欲しいと願った。勿論、そんな人は何処にもいない。ただただ茫然と立ち尽くす博哉に、祖母は言っても無駄だと思ったのか、最後に背中を向けて冷たく言い放った。

「許してあげるから、さっさと自転車引き取ってどっかいってちょうだい」

扉が閉まり、拒絶せんと言わんばかりに祖母は鍵をかけた。突然の敢闘宣告に呼吸も忘れ、周囲からの視線に気付いて恥ずかしそうに頭を掻いた。

（知らないうちに何かしでかしたか？ だから、怒ってあんなトンチンカンなことを口にしたのかもしれない）

だが、祖母を怒らせた記憶はないのが実に困ったことである。それに祖母とは一週間と少し前、最後に会ったのは三日前だ。一週間と少し前は我が家に夕飯のおかずを持ってきた。

挨拶を交わしてお茶をだし、母親と会話を適度に楽しんで帰って行った。

思い返してみれば見るほど、怒らせた心当たりがない。

（お茶に何か変なものが混入していて、家に帰ったら腹を壊して寝込んだとか？ それなら、親戚が来ていた時にお邪魔したら言うような普通。そうすればネタ話にもなるし、話して恥ずかしいもんでもない）

祖母くらいの性格ならそれくらい笑って水に流す。そういう人だ。

それなのに先ほどの扱いはどういう訳なのか、真意がさっぱり掴めない。博哉はこれ以上怒らせてなるものかと、仕方なしに自転車に跨り、庭を出た。

駅まで行くのは構わないが、道中で納得出来ない事があると他に何も考えられない。これでは授業の妨げになってしまう。嘘だ。詭弁である。

博哉を知る者もこの場にいたら「それは違う」と即行でツツコミをいれてくれるだろう。分かっているから望むのだ。

ズボンのポケットから取り出した携帯電話のアドレス帳から母親の名前を選ぶ。

祖母の事情に近い人間は、このアドレス帳の中だと母親だろうと推測した。意外と、祖母の事情にさらに詳しい叔母の電話番号もはいつていたりするが、如何せん訊くのが気まずいし、叔母にも迷惑が掛かる。自分の母親が甥に対して怒る理由なんて聞きたくもないはずだ。

気の知れた相手に訊ねるのが一番と判断し、母親の携帯電話にかける。コール音が一回、二回、三回と続いて四回目にはいった時、電話にでた。

「もしもし？」

「俺だけど。婆ちゃんに関して訊きたい事あるんだ」

「……どちら様ですか？」

素知らぬ口ぶりが博哉の脳を強烈に揺さぶる。

朝の見送りをしておきながら、その反応はない。許しがたい。博哉は母親まで自分を騙そうと電話口でほくそ笑んでいるのを想像し、イラつきを隠せない。

「あのさ、婆ちゃんにもさつき同じこと言われた挙句に怒られた。でも、朝の見送りしてくれた母さんまで、そんなこと言うのは酷くない？ 俺を虐めて楽しいの？」

冗談にしても、相談をもちかけようとしている息子に、誰だお前は対応として有り得ない。それなのに返ってきたのは博哉の待ち望んだ謝罪の言葉ではなく

「婆ちゃんって貴方のお婆さんですか？ どちら様が存じませんが私自身見送りはまだしてないんですけど」
「わかった。もういい」

通話を切った博哉はアドレス帳から大学友人のメールアドレスを引っ張り出して、メール文を打つ。

『今日、学校いけないからノート来週うつさせてくれ』

それだけの文章を送り、今時流行遅れの携帯電話を閉じてポケットにしまい込む。

今日はもう何処にも行きたくない気分だった。身内に「誰だお前？」と言われ上機嫌になる人はおるまい。

（何処に行こうが皆が俺を無視しそうな気がする。公園にいつて時間潰して、立ち読みしてヒトカラでもして、それから……）

自転車に跨ったままハンドルの上で組んだ両手に顎を乗せて考えていると携帯電話が震えた。友人が返信してきたのだろう。博哉は携帯電話を開いて受信メールを開いた。予想通り、先にメールを送った友人からのメールだった。だが、そこに書かれていたのは思い

もよらないものだった。

『どちら様?』

淡泊で残酷な文章だ。よもや友人にまで魔の手が及んでいようとは。一体、何者の悪戯だろう。見つけたら首を絞めて自分の存在を抹消しようとする理由を吐き出させる。生きる事を後悔させてやる。終いには野郎の全部を奪ってやろう。そうさ、それがいい。他人が嫌がる事をするんじゃないと身体に教え込んでやるのさ。どんな奴が背後にいようと関係ない。今なら格闘家さえも倒せるような気がする。

危険な思考に走った博哉は潜めていた笑い声を次第に拡大させ周囲に響き渡らせた。

彼を訝しげに、冷えた眼で見つめる者。笑いを堪える者。価値なしと判断し無視して通り過ぎる者。妙に高い美声に聞き惚れる者。彼らなど眼中になく博哉はただひたすら笑い続ける。

「はあはっはっはっはっは！」

「ちよつと、キミキミ」

「はっは……ああい？」

（ヤバい、サツきた）

明らかに不審者発見といった態度でこちらに歩み寄ってきた警察官。

「何がそんなに可笑しくて笑っているのかな？」

「えーと、その、ちよつとム力つく奴がいます」

「それで？」

「それで、そいつを酷い目に遭わせたら面白いなって考えていました」

「ちょっと、話聞かせてもらってもいい？」

「ごめんなさい、もうしません！」

今の計画犯罪に仕上がってるんじゃないか、とか考える余裕はなかった。

警察官に、厄介事にこれ以上巻き込まれたくないと切に願う些細な抵抗として、博哉は乗っていた自転車のペダルをこれでもかと漕ぎまくる。

「君、待ちなさい！」

（待てと言われて待つ奴なんかいないんだよ。学習せい！）

後ろは見ない。徐々に小さくなっていく警察官の声が恐かった。

完全に見聞き出来なくなる距離まで、ついでに公園まで行こう、と決心したのは直ぐだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3325ba/>

失くし者

2012年1月8日20時47分発行